

保育者の成長過程：高瀬慶子の ライフヒストリー研究(1)

伊東 久実

1. はじめに

保育者の力量および質の向上のために、2008年に改定された保育所保育指針第7章には、「保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人ひとりが、保育実践や研修などを通じて保育の専門性などを高めるとともに、保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協働性を高めていくこと」と明記された。これは、研修および職場の仲間と互いに成長をめざして専門性を高めあっていく関係としての同僚性の重視である。

研修や、同僚性の大切さは理解できるものの、保育時間＝勤務時間という保育士の多忙な勤務実態においては、保育士の成長の土台とも言える日々の実践記録すら取ることが困難だとの声が聞かれる。こうした状況の中にある保育士に、かつて一人の若い保育士が同僚性によって専門性の高い保育士へと成長していく過程を示すことは、意義のあることだと考える。

本研究では、ある保育士の成長の過程を示す方法としてライフヒストリーの研究方法を用いる。この研究方法では、質問紙調査に代表される従来の量的研究とは異なり、ある保育士の他者とは異なる一人の保育士としての固有性に焦点を当てながら、その成長過程に影響を与える要因について考えていくことができる。つまりこの手法によって、ひとりの保育士の個性や独自性あるいは様々な出会いによって形作られたその保育士独自の専門性形成過程を明らかにすることができると思われる。

本論では、高瀬慶子を研究対象とし、彼女の保育者としての成長過程を明らかにするとともに、その過程に影響を与えた人々との交わり、特に同僚性の重要性を示す。高瀬慶子は民間の保育研究組織である保育問題研究会（以下、保問研と記す）において長く研究活動を重ね、保育の方法であり理論でもある「伝え合い保育」を築いた。約40年間の保母生活において豊川保育園（東京都北区）では主任保母を経て園長を努めた人物である。ごく普通の、しかも決して主体的とはいえない女学生だった彼女が、時代性、同僚性によって主体的・自主的な保育者へと変容し、保育者の専門性とは何かを追究することをライフワークとして保母という職業を生きた。「女房役的な役割をこなす資質をもつ」と評され、「目立つことが苦手」と自称する彼女はこの点において、保問研に所属した他の保母とは異なるユニークな存在である。ごく普通、女房役の彼女が戦後の日本の保育史において指導的な役割を担ったことが高瀬の注目されるべき点であると考えられる。このような高瀬の保育者としての意識の変革と、職業人としての変容を

描く。

すでに高瀬は『保育の探求』、『子どもの発達と集団』、『3歳児保育』などの著書の他、多数の実践記録や論文がある。それらのテーマは保育実践、活動の記録が中心であり、その時々の彼女の内面に生じた意識変革や、保育者の専門性への目覚めについては十分に触れられていない。そこで本研究では、平成17年から平成21年までの聞き取り調査を中心に、彼女の歩みの根底にある意識の変革について詳述する。その際、当時の事実情報は、出版物で補う（出版物からの引用は注を付記する）。特に高瀬が同僚性の中で「伝え合い保育」を築き上げる過程で、意識変革と専門性への目覚めは顕著に現われている。そこで、今回はこの時期までに限定し、下記の時代区分①から④までを扱うことにする。

2. 時期区分

- ① 第1期 女子師範教員保母伝習所（1943年から1944年）
- ② 第2期 善行寺戦時託児所および本所区立高橋方面館戦時託児所（1944年から1945年3月）
- ③ 第3期 幼児集団疎開保育園（1945年3月から1945年12月）
- ④ 第4期 野外保育所—戦災地保育—（1946年）
- ⑤ 第5期 保育所作り（1946年から1947年）
- ⑥ 第6期 労働者クラブ保育園（1948年から1953年3月）
- ⑦ 第7期 豊川保育園（1955年8月から1985年3月）

3. 年譜

本論で扱う第1期から第4期までの年譜とする。

西暦	共通する歴史体験	ライフヒストリー
1925		誕生
1941	太平洋戦争勃発	
1943		保母養成所に入学
1944		善行寺戦時託児所勤務
1945	東京大空襲 終戦	本所区立高橋方面館戦時託児所勤務 恩賜財団大日本母子愛育会疎開保育園勤務（桶川の幼児集団疎開保育園にて疎開保育の実践）
1946	民主保育連盟発足	野外保育所にて野外保育の実践 民主保育連盟参加 区立横川橋保育所勤務
1947	日本国憲法発布	民主保育連盟書記として保育所づくり運動に参加

4. 保育者としての成長過程

(1) 女子師範教員保母伝習所（1943年から1944年）

① 促されるまま保母伝習所へ

1943年、第二次世界大戦の戦況は厳しく、空襲警報が日に日に激しくなる中、高瀬は女子学校を卒業した。自らの進路を検討する余地もないまま、「伝習所で資格をとればいいじゃない」という母親の一言で決定した。その時を高瀬は振り返る。「保母なんてやりたくなかったのよ。だけど母がね…。」

伝習所とは、女子師範教員保母伝習所のことである。高瀬の母もそこを卒業し、娘時代を幼稚園保母として働いたという。当時の上意下達の命令型教育は、高瀬の保育士人生をこのような形で方向付けた。保母になりたくなかった理由は明白であった。

第一に、弟が三人、妹一人の頭としての自分には、幼い子どもの可愛らしさより先に「いたずら」や「きかんぼ」たちに邪魔されるわずらわしさの方をよく知っている。第二に母の仕事を通して知っている保育の中身は面白くないことが多かった。なんとなく子守的な保育者の地位、一級五十人も受持って、どうしたら一人一人の子どもを覚えられるんだろう。それに相手が子どもとはいえ、大勢の目の前に立って歌ったり踊ったりお話ししたりなど自分の不得意なものばかり、という不安が多かった¹⁾。

こうして、自ら望むわけでもなく気乗りのしないまま高瀬の保育士への道はスタートすることになったのである。

② 戸越保育所の保母たちとの出会い

当時の保母伝達所について高瀬は、「一年間の就学期間で、1クラス100人程の2クラスで構成されていた。保母という仕事に憧れや希望を抱いて通う女学生ばかりでなく、私のように親の命令で仕方なく、あるいは心のどこかで徴用を回避したいと思う気持ちから通っていた子も多かったかもしれないね」と振り返る。高瀬自身も「どうせ徴用でお国のために訳のわからない仕事をするよりは、保母の方がまだましかなと思ったのよ」と語る。

消極的な気持ちで臨んだ保母伝達所での日々ではあったが、教鞭をとっていた三木安正の「保育理論」は、高瀬が心惹かれた講義であった。高瀬は講義について、「三木先生のお話は楽しかったわ。保育と社会のかかわりの話が耳新しかったのね。」と、思い返す。

三木の授業の中で、女学生高瀬の保母に対するイメージを一変させる機会が訪れた。それは、1943年の夏のことである。

三木先生の授業の中で、虎ノ門社会館へ行ってご覧なさい、と皆に誘いがあったの。それでたまたま前後の席だった友だちと、ちょっとおもしろそうだねって、行ってみることにしたのよ。

虎ノ門社会館では、日本保育研究会が開かれていた。

当時の時世もあり、研究会では保育内容に関するお遊戯やリズム、運動など当たり障りのない研究内容だった。それでも教材も何もない時代だったので、若い私はこの会に出席する必要性を感じたのよ。

高瀬は、保育伝達所の授業を終えた後に時おり日本保育研究会に参加していた。ある晩、戸越保育所の保母グループによる人形劇の発表が行われていた。それは、高瀬に強い印象を与えた。戦火が激しさを増す中であって、父母が演じる人形劇を子どもに披露するなど、進歩的な保育をしていたのが戸越保育所である。高瀬は、「畑谷さん、塩谷さん、お母さんたちが演じる人形芝居の場の雰囲気呑まれた。」と語る。高瀬を圧倒したこの保母集団は、それまで高瀬が抱いていた「何となく子守り的」な保育者像を一変させた。戸越の保母らは、高瀬にその頃の幼稚園、保育所の保母たちとは異質な近代的自由さを感じさせた。

さらに、

別の世界にいる人達のように、自分から近づく程の積極性はなかったけれど、保育する仲間にあのようなグループがあることを知っただけで目の前が開けるような感じをもった²⁾。

と言う。この日「別の世界にいる人たちのよう」だった戸越保育所の保母畑谷光代が、高瀬の長い保育士人生の力強いパートナーになるとは、当時の高瀬は微塵も予想していなかった。

(2) 第2期 善行寺戦時託児所および本所区立高橋方面館戦時託児所(1944年から1945年3月)

① 保母高須との出会い

1944年3月、保母伝習所を卒業した高瀬は自宅に近い幼稚園に勤務した。しかし、幼稚園閉鎖令のために幼児教育機関がすべて戦時託児所に移行していく中で、善行寺戦時託児所というお寺の仏間を保育室とした小さな託児所で働くことになった。高瀬と先輩同僚2人きりで託児所の近くに住む子ども30人ほどを保育した。

それまでの高瀬は、保育といえば、子どもたちに決まりきった歌やお遊戯を教えることだと思っていた。しかし先輩保母高須について、高瀬は「保育を創造することを教えてくれた」人

物であると語る。

その人さっささと自分で歌つくってみたけどどうかしらと相談してくれたり、「みんなおいで」なんてさあっと座らしちゃうと「こっちには何とか村があつて、そっちには何とか村があつて、こっちの村の子どもはいつもけんかしてて、そっちの村の子はいつも仲良しでした」なんてー。結局、けんかしている村の子どものほうが、いい子なのね³⁾。

さらに「私はその人から、『社会』って言葉とか、人間は助け合って暮らさなければいい世の中にはならないとか聞いたのね。その頃そんな話をしてくれる人はいなかった」と話す。

高須は、区立深川託児所に勤務していたが体を壊し、寺に付設した自宅近くのこの善行寺保育所で働くことになったという。社会の構造などに無関心だった若き高瀬にとって、言論統制の厳しい当時に、「社会」や理想的な世の中を築くために各々が自由に意見を述べ合うことの必要性を示唆する人物との初めての出会いであった。

この小さな戦時託児所での保育を憂いた高須は、高瀬に次のように言ったという。

「あんたみたいな若い人は、もっと仕事のしがいのある所で働きなさい。」こうして、高瀬に本所区立高橋方面館戦時託児所を紹介したのであった。

② 東京大空襲と鈴木とくとの出会い

高瀬が訪れた高橋方面館戦時託児所は、当時、貧困救済家庭の子どもたちを預かる保育所であった。この託児所勤務に際して高須が紹介したのは以後高瀬の相談役となる先輩保母の鈴木とくであった。鈴木は本所隣保館に勤務しており、かつて本所隣保館において高須の同僚であった。

高橋託児所に移ったその時の驚きを高瀬は、「このあたりの公立保育園では、戦争の真っ最中に1歳児保育も行うような、進歩的な保育をしていたのよ」と振り返る。さらに高橋託児所の保育について次のように続けた。

園長の考えで、子どもたちは軍歌を歌わないの。そこで不思議に思って「この託児所ではどうして軍歌を歌わないのですか？」と尋ねたら、「小さい子どもまで戦争に追い立てる必要ないわよ」という返答だった。それに貧しい街でね、母親を助けるという思想や世の中の矛盾に反対する気持ちのある場所だったね。

高瀬は、園長と同郷という鈴木と、高橋方面館戦時託児所において交流する機会を与えられていた。「保母の仕事に母親を助けるという視点」を加えたのは、勤務する園を越えて行われ

る鈴木との交流のおかげだと高瀬は言う。

高橋託児所の保育は、本土空襲が日ごとに激しさを増す1945年冬も続けられた。「焼夷弾で雪がピンクに染まり、それはきれいだった。東京の空襲はひどくなる一方だった」と高瀬はこの頃の記憶を語る。

日々の保育は、子どもたちを防空壕に入れたり出したりすることに追われていた。ある日は防空壕の中であろうそくの光を頼りに絵本を読み、おやつを食べるなどして母親の迎えを待ったわ。

1945年3月10日、高瀬の暮らす東京下町は米軍からの大規模な空襲を受けた。東京大空襲である。翌朝、早番だった高瀬は、電車が止まったためまだ火が燃えるその中を子どもたちやその家族を案じて高橋託児所まで無我夢中で歩き続けたという。「ちょうど託児所のある方向が真っ赤に燃えているのが見えてね、子どもたちは？ お父さんお母さんたちは？ と、豪徳寺の自宅から高橋託児所まで夢中で走って行っちゃった。」

一夜にして昨日までの子どもたちの姿もない。付近一带果てしなく続く燃えいぶる跡、むせぶような死の臭い、傷ついて人を呼び合ううめき声の中を、子どもたち母親たちの姿を求めて歩いた⁴⁾

たどり着いた託児所で高瀬が目にしたのは、園舎で焼死した多くの遺体だったという。「子どもたちや近所の人たちがここへ逃げて来たんだろうけど、皆蒸し焼きになっていたね。」

翌日、親を亡くした子どもを集めるのに保母の手助けが必要であるとの要請があり、役所の担当者とトラックで焼け跡をまわった。「託児所の他の子どもたちはどうしたろう。」と懸命に探す高瀬がばったり出会ったのは、受け持ちの3歳児の光枝とその兄弟3人を連れた父親であった。

「これからどこへ行くの？」という高瀬の問いに「わからない」とだけ父親は答えたという。父親は徴兵令で出征せねばならず、幼な子4人を抱えて焼け出され、途方に暮れていたのがあった。わずか20歳になるかならないかの高瀬も、この現実を前に途方に暮れるのは同じであった。しばらくして鈴木と合流した高瀬は、今後について尋ねられた。そしてこうつぶやく。

高橋の保育園が戦災で焼けてどうしようかなと思って、でもここまで保育をやってきたんだから、もう一歩やんなきゃと思ってるんだ⁵⁾

この高瀬の言葉に対して鈴木は、「じゃあ、愛育会附属の疎開保育園に行きなさい」と勧めた。

こうして19歳の高瀬は、光枝とその姉である6歳の玲子、5歳の和江の3人を連れて、埼玉県桶川市の幼児集団疎開保育園へ向かうことになったのである。

かつて親に勧められ、仕方がないから保母の道に進んだ高瀬であった。先輩保母高須のもとで微かに「社会」という言葉に触れ、鈴木との出会いで保母の役割を感じ始めた時、昨日まで託児所で同じ時間を共に過ごした子どもたちの一夜にして変わり果てた姿を目の当たりにした。彼女は心底から戦争の悲惨さ、恐ろしさを実感した。「何故、こんな無残な苦しみを続けてまで戦争をしなければならないのだろうか」という、当時は禁じられていた疑問と怒りが湧き出した。「もう一歩やんなきゃ」は、確かに子どもの生活と命を守るべき保育者としての使命感を静かに感じ始めた高瀬のつぶやきであった。

(3) 第3期 幼児集団疎開保育園（1945年3月から1945年12月）

① 畑谷光代との出会い

高瀬は鈴木との誘いに応じ、幼児集団疎開保育園での保育を決意した。幼児集団疎開保育園とは、昭和19年11月、愛育会所属の戸越保育所と、横川橋愛育隣保館の両施設から疎開先のない幼児80人余りと、職員19人が埼玉県桶川在平野村の無住の寺へ疎開した24時間保育所である。高瀬は東京大空襲の後、4人の子どもたちを連れ、この疎開保育園に合流したのだった。

「私は、ほんのちよっぴりしか参加してないのよ」と語るが、9ヵ月の疎開保育園での実践は高瀬にとって、「新しい保育の姿勢に接することができた」ものであり、彼女が保育士の歩み30年を振り返った時点で、「現在の、私の保育に深くつながる糧になっている」⁶⁾日々であった。また、この疎開保育園では、かつて「異質な近代さ自由さ」と高瀬に感じさせ、「別の世界にいるようだ」と思わせ畑谷光代との再会が待っていた。

高瀬は、桶川の駅から疎開保育園である寺まで一里の道のりをトボトボ歩いたという。「子どもの命を守る、子どもの生活を守る」使命感に後押しされていたとはいえ、無住の寺での24時間保育勤務の苦勞は容易に想像された。わずか19歳の高瀬の疎開保育は、「そこに行くしかない、家にいたってどうせ徴用、それなら…」⁷⁾という、使命感と不安感のせめぎ合いの中で開始された。

疎開保育園で高瀬を迎えたのは、すでに半年近く前から疎開生活を実践していた27歳の畑谷光代、同じく27歳の山田久江、25歳の福知トシらの姉的存在の保母と、高瀬とほぼ同じ年回りの福光えみ子、伊井澄子らであった。(鈴木とくは34歳、高瀬の合流した時は東京・愛育研究所との伝達係りになっていた。)

特に、疎開保育園の責任者となっていた畑谷は高瀬にとって「人間的に親しめる人だった」と振り返るように、不安で一杯の若き保母を明るく受け入れ、「対等に何か教えてくれる」⁸⁾

頼れる存在だった。

あの頃ね、栄養失調でだれでもおできなんかできるでしょ。私もおできがでちゃったのよ。そしたら畑谷さんたら、アンタちょっと実験してって、おできの真ん中から半分に分けて、「どっちの薬の方が早く治るか実験してみよう」なんて言うのよ。おもしろい人よね。

その頃、畑谷さんみたいな立場に立つ人って、若い人をかわいがる人とかわいがらない人にわけると差別するのかな、職場の中でかげの不満がうずまいていて、すごく不潔だと思ってたのよね。畑谷さんはそういうこと、絶対になかったの。⁹⁾

新米保母高瀬にとって畑谷の、いわゆる目下の者と共に、一つの事象をおもしろがり、かつ科学的に物事を考えていこうとする姿勢は、それまでに高瀬が触れたことのないものだった。畑谷自身は、戸越保育所の勤務において、保育所内ではお互いに先生呼ばわりしない対等な人間関係を身に付けた人物であった。高瀬は、疎開保育園において当時としては珍しい対等な人間関係・保育者関係の存在を初めて知ったのだった。

② 犠牲的精神に抵抗する保母集団への参加

対等な人間関係に恵まれたとはいえ、24時間の疎開保育は過酷を極めたという。

一人でいる時間などは、もちろんなかった。食べる時間も、眠る時間も、最小限度よりも以下であるという状態に、ほとんど変わりはなかった。(中略) 保育をするといっても一そして職員が11人いるといっても、疎開保育園全体の生活がつつがなく進行してゆかためには、この11人は分散しなければならない。なにしろ「保育」だけを行うわけにはゆかない。「生活」が、かかっているのだ。(中略) スキを見ては、風呂焚き、マキ割り、物干し、あと片付け、炊事の手伝い等々。それこそ日常生活のさまざまな雑用を休まずこなさなければ、疎開保育園はやってゆけない。戦争が終わるまで、という不明瞭な期限であざかった五十人以上の幼児たちを、人間らしく育てることが出来ない。¹⁰⁾

子どもたちの保育については、50人以上もの子どもの食事や排泄を能率的に行うために、何人も知恵を出し合った。「全体的流れ作業式」と呼ばれる方法では、一日の時間表の流れにそって当番の保母が分担された仕事を行う。つまり、子どもたちの起床係、洗面係、食事係、入浴係というようにである。一見能率的に思えるこの方法ではあったが、子どもたちにとっては順番を待つ負担が大きかった。子どもたちが順番待ちに、ボンヤリおとなしく順応している姿

に、「子どもというものはこんなものじゃない。あきらめたような、しなびたような、こんないきいきとしない子どもは、子どもと言えないんじゃないだろうか？」¹¹⁾と保母たちはいたたまれず、悩み始めた。

保母たちは、子どもたちの就寝後、何日も何日も話し合いを重ねた。その結果、「全体的流れ作業式」とは異なる、小さい家族単位をつくり、保母一人に対して5～6人の異年齢の子どもと一緒に生活をする「母親制度」を考案した。この熱心な話し合いについて高瀬は、

この頃、疎開保育園の園長であった山下俊郎先生は、週に一度見える程度だったので、話し合いの場で意見をもらったり、指示があったわけではなかった。保母たちの必要性に迫られた建設的な話し合いの場であったし、そういう場で生まれた発想だったのよ

と語る。

このように高瀬は、戦時下の疎開先にあっても、子どものいきいきとした姿を保障しようと努力する主体的な保母集団の中に身を置くことになった。高瀬は、自分の意思を抑えて体制に従うことは誤りであると考えこの保育者集団について、「24時間保育のメンバーには、犠牲的精神に抵抗する思想が息づいていた」¹²⁾と感じている。

1945年8月に終戦を迎えた。疎開保育園の子どもたちは徐々に親や親戚に引き取られた。高瀬と同行した4人の子どもたちも皆、東京へと戻っていった。この年の12月、最後の一人が引き取られ、疎開保育園はその役割を終えた。

高瀬や他の保母たちは、すぐに東京へは戻らず、那須高原まで行き、温泉に浸かってこれまでの疲れを癒したという。

ほっとした。子どもたちが皆帰って…。20歳から27歳までの保母が6、7人でね、このまま帰るのもなんだから温泉へでも行ってみようかってことになったの。言い出したのは大正生まれの人よ。あそび方を知っているのね。私なんか生まれたときから軍国主義真っ只中でしょ。だめね、楽しいこと知る術もなかったのよ。

子どもたちから離れ、久しぶりに保母たちがゆっくり過ごす温泉で、新しい時代すなわち終戦後の保育について語り合ったのだろうか。

そんなこと考えもしなかったわ。ほっとしたという気持ちで一杯で、私にとっては‘明日の子ども’など語る気持ちもないほど、これまでの生活からの開放感に溢れていたわ。

若い娘らしい率直な気持ちが伝わる返答であった。

(4) 第4期 野外保育所—戦災地保育— (1946年)

① 保育所づくり (常設保育園設置) への主体的な取り組み

1946年1月、高瀬は畑谷、伊井、山田らと共に、愛育会研究所 (恩賜財団大日本母子愛育会) において初代園長、森脇要の下、疎開保育園の整理に着手した。

「とぎれとぎれのメモを記憶でつなぎあわせ、一年間の疎開保育の実践を、森脇要氏の指導のもとに整理すること」¹³⁾ ができた。

「一番年下の私は、やれってことをやるだけだね、しょっちゅう叱られながらだったわよ。」と語る高瀬だが、この時の記録をもとに「二十四時間保育の研究」(森脇 1944) が発表された。

「机に向かって仕事をすることに不慣れな保母たちは、うずうずしながら、次の仕事を物色し、(中略) 現場好きな私たちは焼跡勤務を申し出た」¹⁴⁾ という畑谷と共に、本所柳島地区の愛育会隣保館の焼け跡保育 (野外保育) を試みたのは他ならぬ高瀬であった。この時、野外保育に対する愛育会研究所の研究テーマは、「何もない所でどの位の保育ができるか」であった。それは、1946年8月のことだった。

野外保育に向かう畑谷の積極性に比して、高瀬は無自覚的に、流れの中に身を任せての挑戦であったようだ。

なにしろ、戦前一、二年、それも空襲警報の中での保育経験で、施設も設備もない野外保育で何ができるだろうかと迷うより先に、実際に始まってしまいました。¹⁵⁾

何もない所でどんな保育が可能なのだろう。その問いに対して、「遊ぶたって、原っぱや草むらよお。」と答える高瀬は、野外保育の保育内容について次のように記している。

疎開保育園から持ち帰った、絵本、紙芝居、雑巾バケツ、ちり紙などなど保育に最低必要なものを担いでいって始めたわけです。

それ以前に戦災で焼けた当時隣保館の責任者だった鈴木とく先生が地域の当時の父母だった人たちを探して協力を呼びかけていたので子どもたちも四十四余人集まってきました。(中略) 公園の焼けあとのバツとりつみ草、私の下手な童謡うた遊びでも子どもは喜んでついてきます。(中略) 親たちは何も設備がないのはかわいそうだ。せめて椅子を作ろうというので椅子をつくってやりました。(中略) そして椅子を並べてうたを唄ったり、青空天井だから、雲を見よう、あの形は何か、などと、けっこう教材になるわけです。¹⁶⁾

保育を続けるうちに子どもたちは、「何故雨が降ると休みなの？ 保育園の家があればいい」と親に泣いて訴えたという。子どもたちのこうした姿に、高瀬と親たちの意識は高まり、常設保育園の設置を求めていくことになった。この時、これまで力強く高瀬をリードしてきた畑谷が名古屋転勤で不在になったにもかかわらず、子どもたちの保育園を求める姿に後押しされた高瀬が、主体的にこの問題解決に挑んでいくことになった。

常設保育園設置の陳情としては、まず経営主体である愛育会に対して高瀬と親たちが一緒になって直接交渉した。しかし、あえなく却下された。これまで、何事に対しても激しい感情の発露のみられない高瀬であるが、この件については、「くやしく思う」「くやしい」¹⁷⁾ と言う言葉を並べている。この問題解決のために高瀬は、1946年10月に結成したばかりの民主保育連盟¹⁸⁾ のメンバーである塩谷アイ、浦辺史に相談し、熱心に協議した。

これからは働く人たちのための保育所をどんどん作っていかなければならない。それはやはり、働く人たちの組織の中でつくらなければならないんだ。そこで、つくる運動として、まず地域の労働組合に呼びかけよう、ということになったんです。¹⁹⁾

この後、継続的に高瀬が深く情熱を傾けることになる保育所づくり運動は、民主保育連盟に参加することによって、力強く展開されることになった。

② 民主保育連盟への参加を決めた理由

高瀬が24時間保育の整理を行った愛育会研究所には、日本保育研究会の事務所が置かれている。軍国主義の思想統制が保育界にも及ぶ中、戦前保育問題研究会は愛育会の中に日本保育研究会と名称変更して存在していた。²⁰⁾

すでに戦争は過去のものとして整理を始めていた森脇、高瀬らであった。いつものように畑谷と愛育会研究所の2階で作業を行っていた高瀬は、衝撃的なシーンに遭遇する。

愛育研究所所員山下俊郎さんの背広姿とは対照的に、泥だらけの靴、ボロボロの服のままの、浦辺先生と菅忠道さんが私たちの前に現われたの。保問研再建の交渉にいらしたのね。戦後の復興の中で女性も仕事を持つ時代が来るのだから、保育所をつくる運動が大事だという浦辺先生側の主張と、保育学会をつくり保育に関する研究を進めたい、愛育会としては保問研に再編成することはできないという山下さんの主張は大きく対立した。そしてその別れに終わったわ。でも、子どもにとっても母親にとっても、現場には保育所が必要だった。

この交渉決裂で、愛育会研究会とは別の組織、民主保育連盟が誕生した。「机上の学問より、戦後の新しい日本を立て直す親と子のために保育所を作り、その在り方を考えたい。」研究所2階の交渉シーンに遭遇した高瀬は、そう決心した。民主保育連盟の一員となった高瀬は多くの会員と共に、戦争のない世の中で保育を続けていく方法や、民主主義の意味やあり方を追究しながら、保育所づくりに邁進して行くことになった。

5. 小結

自ら志望した保育者の道ではなかったが、母の意志に内心反発しながらも、高瀬は「どうせ徴用よりはまし」という非主体的な気持ちで保母養成所に足を踏み入れた。時代は、自分の要求を出すことが許されない上意下達の軍国主義の真っ只中であった。保育者の社会的役割や実際の仕事の中身について何も知らない高瀬は、子どもの前で歌を歌い、お遊戯を踊るだけのイメージで、「保母は自分には向かない、好まない職業」と感じていたのだった。

しかし、戦時の暗く重い毎日の中で、彼女が出会ったのは、父母らと共に明るく、近代的な保育を行う保育者集団であった。さらに同僚との交わりの中で、保育者は社会と深く関わりをもつ職業であることを感じ始めた。そんな時、東京大空襲に見舞われ、彼女の受け持つ子どもや親たちの悲劇を目の当たりにすることになる。疎開保育園（24時間保育園）という、これまで前例のない過酷な保育に携わることになった高瀬は、まさに寝食を共にする同僚達と一緒に、戦争のない世の中を強く求め、主体的に子どもと関わる保育者に成長していった。

このことは新米保育者高瀬が、取り囲まれる保育者集団や、社会状況によって職業観を形作り、職業に対する責任感を育てていくことを如実に語っている。次稿では、保育者の社会的使命を理解した高瀬が、保育の考え方やその具体的保育方法を仲間と共に懸命に模索し、専門性を高めていく姿を描くこととする。

注

- 1) 高瀬慶子、『保育の探求』1977、新読書社、pp.369-370
- 2) 同上、p.373
- 3) 同上、p.229
- 4) 同上、p.260
- 5) 同上、p.229
- 6) 同上、p.373
- 7) 同上、p.229
- 8) 同上、p.229
- 9) 同上、p.231

- 10) 久保つぎこ、『君たちは忘れない—疎開保育園物語』1982、草土文化社、p.124
- 11) 同上、p.143
- 12) 高瀬、前掲書、p.373
- 13) 畑谷光代、『つたえあい保育の誕生』1968、博文社、p.13
- 14) 全国保育問題研究協議会編集委員会、『季刊保育問題研究No63』1978、p.100
- 15) 同上、p.100
- 16) 同上、p.100
- 17) 同上、p.101
- 18) 乳幼児を完全にまもり正しく教育するに必要な新しい保育施設をつくりひろめることにつとめ、保育にあたるものの教養をたかめ、その社会的地位を守ることを目的として、羽仁説子を会長として発足した組織。(『保育小辞典』2007、p.325)
- 19) 同上、p.101
- 20) 全国保育問題研究協議会編集委員会、『季刊保育問題研究No61』1977、p.7

キーワード

保育者の専門性 協働性 同僚性 ライフヒストリー